

第642回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2022年4月度 ——

◇ 開催日

2022年4月18日(月)

◇ 議題

<テレビ番組>

「えんホールディングスグループ presents

旅立ちの日2022」

放送日時：3月21日(月・祝) 午前10時25分～11時40分

◇ その他

「2021年度下期の番組種別の公表報告」

九州朝日放送株式会社

第642回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2022年4月18日(月)午後3時25分～4時35分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 6名

副委員長	石橋	和幸
委員	石井	靖子
委員	藤村	まこと
委員	丸石	伸一
委員	田川	真司
委員	上野	恵梨奈

欠席委員数 2名(レポート提出)

委員長	赤木	由美
委員	中山	裕二

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣	靖
執行役員	岩村	智
報道情報局長	柴田	高宏
総合編成局長	大保	一
総合営業本部 プロデューサー	中間	雄大

番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	園田	哲也
番組審議会事務局(視聴者・広報室)	松永	俊郎

4. 議題

- (1) テレビ番組 「えんホールディングスグループ presents 旅立ちの日2022」
放送日時：3月21日（月・祝）午前10時25分～11時40分
- (2) 2021年度下期の番組種別の公表報告
- (3) 4月・5月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告
- (4) 3月 視聴者・聴取者応答状況の報告
- (5) その他

5. 議事の概要

委員の意見（概要）

委員からは、

- どのエピソードも胸を打つストーリーで心が洗われた。高校生が感謝を伝えようとする思いがひしひし伝わった。先生の苦労や心情、優しさに触れて涙腺が緩んだ。番組が進むにつれて、みんなで卒業を祝いたいという気持ちが強まる心温まる内容だった。
- 本作はコロナ禍で失われた機会や高校生活について触れながらも、暗くなりすぎず、前向きな内容にまとめられていた。高校生という若い世代の素顔を上手に切り取った撮影と番組構成は、若い人たちの持つエネルギーと活力を伝えていた。
- 旅立ちの季節に高校生への感謝とエールを込めて番組を制作したという番組趣旨はとても良い。高校生だけに焦点を当てず、先生や保護者など周りの人とのつながりに焦点を当てている点が興味深かった。互いを思いやる発言や様子により大きな感動を覚えた。
- コロナ禍でまさに「失われた2年間」を過ごした高校生の様子や思いがよく伝わったし、コロナ禍だったからこそ先生と生徒、生徒と保護者の絆がより強まったと感じた。
- コロナ禍でも、できることを探し、懸命に取り組むことの大切さ、諦めない気持ちによって成し遂げられることがあることを改めて気付かされた。コロナに限らず世界では悲しいニュースに触れる機会が多い中、沈んだ気持ちを癒し、とてもほっとできる、人の温かさや優しさに触れられる番組だった。
- 野球場を借り切って演奏した西短附属吹奏楽部の力のこもった演奏はとても良かった。演奏に合わせて試合のシーン(録画)も放映され、まさに本番の応援が実現したようだった。先生の生徒を思う人柄がにじみ出ていた。行動力に感動した。
- 校庭で花火を打ち上げ卒業式に藤巻亮太さんのビデオレターを企画した新宮高校の先生の計らいは粋だ。淡々としたキャラのようで熱いハートの先生なのだろうと感じた。
- 複数の感動物語の間に少し落ち着いた気持ちになれたのが「2022年卒業生に聞く君の名は」だった。今どきの高校生の名前は大変ユニークだと思ったし、一人ひとりの名前の由来を高校生が自ら語るのもまた良かった。
- コロナ禍に関するエピソードではあったが、本作はそれを超えた普遍的なテーマとして、感謝や絆、高校生の純粹さや若さを描いており非常に胸を打つ内容だった。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- コロナ禍で学校生活に大きな制約が生じたことは「しかたがない」けれども、納得がいかない高校生たちの思いや心の叫びを伝えて欲しかった。
- 5つの高校の生徒、先生、保護者が登場したが、取材対象が広すぎたように感じた。取材対象を限定し、より深く生徒の卒業に向けた思いが聞ける番組にして欲しかった。
- 野球場を借り切るための先生の苦労談や、校庭で打ち上げ花火を打ち上げた先生の苦労話なども取材して欲しかった。
- MCの出番が少なく、役割も中途半端な気がした。自らの高校時代の思い出を語らせてたり、どのエピソードにも何かコメントをすればコンセプトがより伝わった。
- 盛り上がるところでCMに入る場面が気になった。視聴者の立場に立ったCMの入れ方を考えて欲しかった。
- 一つひとつのサプライズは、生徒や先生による企画なのか、番組が用意したものなのか区別が難しかった。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- KBCは「ハイスクwish」を中心に様々な番組や企画で日ごろから高校生たちに取材でお世話になっている。コロナ禍で長らく我慢を余儀なくされている高校生たちに何かこちらからできることはないかと考え番組の企画に至った。
- 「いろいろなイベントが無くなりかわいそう」との先入観があったが、取材を進めるうちに平時にも増して生徒と先生や保護者の強い信頼関係が生まれていると感じた。主役は卒業を迎える高校生だが、先生や保護者など、卒業生を取り巻く大勢の人にとっても「旅立ちの日」であることを伝えたいと思った。
- 去年12月に企画を思いつき、1月と2月に取材を行った。もう少し時間をかけて丁寧な取材ができていれば、もっと深みのある番組にできたと思う。限られた時間の中で企画に賛同いただける学校関係者と電話やファクス、リモート会議でディスカッションを重ね、互いのアイデアを持ち寄り様々なサプライズを計画した。
- 「MCの出番が少なく、役割も中途半端」とのご指摘はその通りだ。出演者の言葉を通して伝わる応援のメッセージもあると思うので、今後の番組作りに役立てたい。
- 自宅で「ながら視聴」する一般視聴者と受け止め方は異なると思うが、より集中力を途絶えさせないCMチャンスの在り方を意識しながら番組制作に挑みたい。
- 本作はコロナ禍がきっかけで制作されたが、普段からKBCは地域の人たちを主役にした番組づくりを手掛けている。今後も地域の高校生を応援する番組を制作したい。

などの説明をしました。